

フィクションの中の能海寛

タイトル	フィクションの中の能海寛
著者名	高本康子
雑誌名	能海寛研究会機関誌『石峰』
号	第 15 号
ページ	9－19
発行年	2010.3.15
E-mail	Sekihou@hazaway.com(能海寛研究会)

ISSN 1883-4183



中国僧姿の能海寛

能海 寛 略歴

能海寛 法名法流。 石峰と号す。明治元年5月18日島根県浜田市金城町長田（当時は東谷村）浄蓮寺に生まれる。12歳で得度し、慶応義塾と哲学館に学ぶ。恩師南條文雄師の意思を継ぎチベット探検の論文『世界に於ける佛教徒』を発表すると共に語学の研究と山岳登山による体力の練磨をなす。郷里にあつては地方史を編纂して和歌を詠み、益田沖の高島にて寺小屋を開設する。哲学者、探検家、宗教家として釈迦直伝の大藏經の經典を求め英訳經典世に出す目的で当時鎖国中であつたチベットへ求道のため身を挺し仏教巡礼探検を実践した功績は偉大で有言実行と用意周到さは後世に幾多の教訓を残す。その苦難の34年の生涯に「般若心經」西藏文直訳（梵・藏・漢・英）など四巻が著書として永遠に伝う。

フィクションの中の能海寛

群馬大学 高 本 康 子

1. 能海フィクションについて

能海を題材にしたフィクションとしては、2006年の北森鴻『暁の密使』（小学館）が知られており、これは『石峰』第11号（2006年）にも、「能海寛関連の図書紹介」に、『能海寛著作集』第1-4巻とともに紹介されている（52頁）。これに対し、本稿で取り上げる鹿島桜巷の『世界の秘密国』三部作は、1906（明治39）年、すなわち能海寛横死報道の直後に書かれたものである。能海の生きた時代に非常に近い時期のフィクションであり、恐らく、能海に関係する記述の中で、フィクションとして書かれたものとしては、最初のものではないかと思われる。

本稿では以上の点に注目し、その作品中において、能海という人物像がどのような有り様をもつかについて検討する。

2. 鹿島桜巷について

この三部作の著者鹿島桜巷（1878-1920）は、本名を鹿島淑雄といい、茨城県鹿島町の鹿島神宮大宮司の三男として生まれた。父則文（1839-1901）は、伊勢神宮の宮司をも務めた人物で（下記『鹿島人物事典』、52-52頁）、淑雄の兄が鹿島神宮の宮司を引き継いでいる。淑雄自身は、茨城県水戸の『いはらき新聞』、『報知新聞』の記者として活動した。『鹿島人物事典』（鹿島町史別巻、鹿島町史編さん委員会編、鹿島町、1991年）には、代表的な著述として、1911（明治44）年の『近藤勇』（国民書院）が挙げられている（53頁）。新撰組関係の記述では、他に、鹿島淑雄の名で出版した『新撰組実戦史』（新人物往来社、1975年）があり、巻末所収の解説佐藤昱「近藤勇伝をめぐって」に、鹿島が『東京日日新聞』の記者でもあったことに言及がある（193頁）⁽¹⁾。また、新聞劇評家たちの

集まりである「若葉会」⁽²⁾のメンバーでもあったことから、少なくとも一時期は、劇評を書いていたと思われる。

国立国会図書館所蔵分の彼の著作からは、一定の分野に限られない執筆活動をしていたように見受けられる。例えば『海の豪傑』（樋口源次郎、1914年）といった冒険物、『結婚の秘訣』（也奈義書房、1907年）といった実用書、『名家模範新体詩集』（大学館、1906年）などの文学に関連するもの、『江藤新平』（実業之日本社、1911年）といった評伝など、いわば、時流に合うものを何でも書いていたと言えるだろう。例えば日清戦争の直後、

(1) 原文では「東京毎日新聞」とあるが、『東京日日新聞』を指すと思われる。

(2) 「若葉会」は、新聞の劇評に関係する人々の集まりで、メンバーの中には岡本綺堂（1872-1939）などの名が見える（秋庭太郎『東都明治演劇史』中西書房、1937年、434-435頁）。1905（明治38）年に結成され、メンバーによるいわゆる「文士劇」と呼ばれる演劇を1905（明治38）年とその翌年の2回、上演した。

武士道論が流行した際には、「近頃の流行語となつて居る武士道とは早く鉄舟に因つて称へられ、其行に示されて居る」（大学館、1911年、127頁）という理由で、『幕末二傑 海舟と鉄舟』を書いている。

同様に国立国会図書館所蔵分の著作を見る限り、彼の著作出版が最も多いのが1906（明治39）年と1907（明治40）の両年である⁽³⁾。本稿で取り上げる三部作も、この時期に属する著作である。また、この三部作の出版元である大学館は、鹿島の著作を最も多く出版している書肆である（35件中14件）⁽⁴⁾。従って当該三部作は、彼の出版が最も多かった時期に、他の多くの著作とともに出版されたものであることがわかる。

3. 作品の概要

この三部作は、以下の順で連続的な物語を構成している。すなわち、第一作が『世界の秘密国』（東京大学館、1906（明治39）年1月3日発行）、全30章、204頁、第二作が『無底湖の秘密』（東京大学館、1906（明治39）年2月17日発行）、全29章、193頁、第三作が『不死の霊窟』（東京大学館、1906（明治39）年4月28日発行）、全35章、191頁である。それぞれの内容から推して、少年向けの小説であったのではないと思われる。定価はいずれも25銭で、1906（明治39）年1月、2月発行の少年雑誌『少年世界』が10銭であったことを考えると、このような少年雑誌の購買層が入手しやすい価格であったと推察される。

物語は、主人公「広海譲」が、「遠大の志を抱き、孤剣飄然として蒙古の内地に入り、遂に世界の秘密国たる西藏に入りし由は一昨年内地に於て聞し所なるが、爾来杳として其消息を聞かず」（『世界の秘密国』、16頁）というところから始まる。日露戦争中、突如として「広海氏横死」（『世界の秘密国』、19頁）の知らせが日本に届く。その内容は、「其広海君が目的たる西藏の探険を終つての帰途、残忍なる魔僧の手に非業の最期を遂げられた」（『世界の秘密国』、14頁）というものであり、その知らせは「満洲軍の第三軍に属して、現に戦地に居らるゝ宮川大佐」（『世界の秘密国』、16頁）が情報源であった。その後インドに近い洞窟で、「大日本帝国臣民広海譲、西藏魔僧が妖毒の為に千秋の恨を吞で此処に死す」（『世界の秘密国』、20頁）と書かれた広海の遺書が見つかる。その後、物語は以下のように展開する。

第一作目の『世界の秘密国』では、広海の搜索隊がインド、ネパール経由でチベットのローに至り、広海と再会する。一行はマナサロワール湖で義軍を旗揚げし、首都ラサでチ

(3) 国立国会図書館所蔵分の著作では、1901、1902、1904、1926年が各1件、1905、1910、1917年が各2件、1911、1915年が各3件、1908、1914年が各4件、1906年が5件、1907年が6件となっている。

(4) 大学館は当初、巖谷小波の「木曜会」関係者の著作、特に押川春浪の著作の出版が多かったが、押川が博文館に移って以後は、渋江保（拙斎、羽化仙史）の作品が多く出版された（藤元直樹、「渋江保の著作活動—博文館・大学館・三才社をめぐって」日本出版学会歴史部会2005年10月14日発表要旨）。

ベットの实権を握る宿敵チー・リンポチェを倒すため、ラサへと向かう。

第二作目の『無底湖の秘密』では、広海たちがラサへ向かい、チベット人たちを味方につけながら、「妖僧」チー・リンポチェを追い落とすまでが描かれる。

第三作目の『不死の霊窟』では、チベットの大洞窟「不死の霊窟」を舞台に、再び現れたチー・リンポチェとの戦いが描かれる。

これらの作品の内容には、特徴が2点指摘できる。すなわち、①物語が展開する際の諸状況に、河口慧海の旅行談、旅行記『西藏旅行記』（博文館、1904年、以下「河口旅行記」）と共通する内容が多々見られるということと、②登場人物の描写が非常に定型的事であることである。

4. 河口旅行談との共通点

まず最初に、人名を取り上げる。まず、河口旅行記下巻巻頭写真には、河口にネパールで便宜を与えた人物として「泥巴爾国執権総理大臣チャンドラ、サムセール殿下」とあるが、これはそのまま、『世界の秘密国』において「執権総理大臣チャンドラ、サムセール殿下」（19頁）として登場する。また、河口旅行記に「ミステラーと云ふ、女宣教師」が、ラサに到達しようとして果たせず、国境の関所がある「ニヤートン」に滞在中であると記述されるが（下巻、346-347頁）、これも『世界の秘密国』に、単身で入蔵に挑んだ「女丈夫」、「英国の女宣教師ミス、テラー」として言及される（40頁）。また河口旅行記において、河口の入蔵に終始援助を与えた「西藏語と英語の大辞典を著しつゝあるサラット、チャンドラ、ダース」（上巻、275頁）は、『世界の秘密国』において「西藏語の研究をして居る大博士サラット、チャンドラ、ダース氏」と紹介され、やはり日本人一行のアドバイザーとして登場する（59頁）。いずれも、各人物への言及のされかたは、『西藏旅行記』の記述をほぼ踏襲したと言い得るほど似ていると言える。

しかし人名は共通であっても、両者において全く異なる人物像となっているものもある。第一は、「西藏の豪傑」として登場する「アルチュー、ツルグー」（『無底湖の秘密』、5頁）である。彼はマナサロワール湖の周辺地域を縄張りとしていた「賊魁」（『世界の秘密国』、182頁）であったが、広海の義気に感じ、チベット人たちを糾合して広海らとともに打倒チー・リンポチェとの戦いに挑む。この人名は、河口旅行記の「アルチュ、ツルグー」（上巻、121頁）とほぼ同一である。河口旅行記では、「アルチューの化身」という意味の名を持つ尊い活仏であったが、「美しい女を女房にして寺の財産を悉く女房の家に送つて揚句の果に残りの品物をスツカリ纏めて何処かへ逃げて了つた」（以上、上巻、169頁）という経歴の持ち主である。しかしヒマラヤを越え、チベット西部に出た河口と出会い、河口の仏教者としての徳に感銘を受け、その後河口を厚遇し世話をする。

第二は、「チー、リンポチェ」であり、「座台宝といふ意味」（『世界の秘密国』、173頁）という説明までは共通しているが、物語の中で付与されるこの人物の役割、性格は、河口旅行記とは全く異なるものとなっている。河口旅行記では、「チー、リンポチェ」は「西藏最高等の僧の位」であり、「実地の学徳の上から云へば法王より此の方が尊い」（以上上巻、402-403頁）とある。河口はラサで、この人物に教えを受ける機会があった。その際、リンポチェは河口が日本人であり、身分を隠してラサに滞在していることを推察し

ている様子であったが、それについてとがめ立てすることなどなく、「真実に仏教を教えて下すツた」（上巻、403 頁）という。河口はこの人物に対して敬意と感謝をこめた記述をしている。

しかしこの三部作では、「西藏法王の信任の重い妖僧で、殆ど西藏の政治宗教を一人で支配して居る位の大権力を有して居る」とされる（『無底湖の秘密』、16 頁）。更に、「西藏に行はるゝ一種の魔術を深く研究して、最も其蘊奥を窮め、世間百般の隠事を座ながらにして知る」（『世界の秘密国』、173 頁）とされる。

この人物像は、河口旅行記においてチベットとロシアの関係に触れる部分で言及される「ツアンニー、ケンポ」（下巻、169 頁）を連想させる⁽⁵⁾。この「ツアンニー、ケンポ」は、ロシア領モンゴル（「ブリヤッド」、下巻 168 頁）出身の「ドルヂエ」（下巻、169 頁）という僧侶で、ダライラマ法王の「問答教師」（下巻、170 頁）の一人とされる⁽⁶⁾。

「ナカナカの才子ではあり又度量もある人」（下巻、169-170 頁）で、彼はロシア政府から多額の援助を受けてそれをチベット当局の各要路にばらまき、政治的勢力を拡大した（下巻、170 頁）とされる。ダライラマをも、いわば籠絡してしまい、「法王はツアンニー、ケンポの言ふ事なればドウ云ふ事でも肯くと云ふ程に惚込ンで了ツた」（下巻、170 頁）という点は、三部作における「チー、リンポチェ」の、「彼が放つ妖言は、悉く法王に採用せらるゝ」（『世界の秘密国』、173 頁）という表現と重なるものがあると言えよう。

この点で、河口旅行記で同様に「西藏第一の高僧」とされる「大獅子尊者」（以上上巻、22 頁）とは対照的な扱いとなっていると言えるだろう。『世界の秘密国』において「大獅子尊者」は、「当時法王とその権力相斉しかつた位の勢力のあつた西藏第一の高僧」であり、主人公広海譲を非常に「信任して居る」人物として登場する（172 頁）。一方河口旅行記では、「宗派的或は国際的關係を離れて全く仏教の真面目の意味を世界に布教したいと云ふ考へ」（上巻、23 頁）を持っていた人物で、ダースにチベット仏教について教授したという疑惑によって処刑されたとされる。おのが「本分」を守り、仏教者としての信念を貫いたその態度について、河口旅行記では、「仏教の道徳を備へた御方は斯くもあるべきものか」と讃辞を惜しまない（以上上巻、22 頁）。この大獅子尊者の処刑というエピソードは、河口旅行記において中心的なものの一つであったと思われる。河口旅行記には、要所要所に挿絵が挿入されているが、この処刑の場面が挿絵の一つにされている（上巻、25 頁）ことから、それはうかがいえる。また、河口旅行談を引用している記述にも、必

(5)これについては、2009 年 7 月 12 日開催の能海寛研究会研究大会において、奥山直司先生のご指摘をいただきました。記して感謝申し上げます。

(6)この「ドルヂエ」は、「ロシア人との間に密接なる宗教上の接触を保っていた」（W.D. シャカッパ『チベット政治史』貞兼綾子監修、三浦順子訳、亜細亜大学アジア研究所、1992 年、253 頁）シベリアのモンゴル系ブリヤート人僧侶ガワン・ロサンを指す。彼は、1880 年にデブン寺に入り、ダライラマ 13 世の信任を受けて活動した（山口瑞鳳『チベット』上巻、東京大学出版会、1987 年、59-60 頁）。

ず含まれるエピソードの一つであり⁽⁷⁾、それは当時、河口旅行記、もしくは河口旅行談の読者にとって最も印象の強い場面の一つであったことを示していると言えよう。

次に、地名が使われている例を取り上げる。この三部作の物語が展開されていく地域は、「タライ、ジャングル」―「カタマンド」―「ロー」―「マナサロワ湖」―「ギャー、トー、ターサム」―「セースム、コンパ」―「ハルヂエ」―「シカチエ」―ラサであり、これは河口旅行記における地名の登場順を容易に連想させるものである。

また、それぞれの地名への言及のされ方にも、河口旅行記の記述と非常に共通する表現がみられる。例えば「セースム、コンパ」は、岩山の上に建てられた寺院で、その岩山の高さは「凡そ三町」、「浅草の凌雲閣以上」（『無底湖の秘密』、121 頁）と説明される。しかしこの二つの表現はそのまま河口旅行記に「岩の高さは凡そ三丁」、「浅草の凌雲閣どころの騒ぎではない」（以上、上巻、263 頁）とあるものだと言えるのである。また、マナサロワ湖近くの交易場「ギャー・ニマ」は、

ギャー、ニマの市場がある、この市場は七月十五日頃から九月十五日頃までの二ヶ月間市場が開かれ、印度部のヒマラヤ山中の土人と西藏人との交易がある、白い天幕張の小屋が何百となく連なつて、双互の産物が山の如く、常は雪中の平野であるが、この三ヶ月間は一小都邑を造り、凡千余の人が入り込んで居る（『無底湖の秘密』、13 頁）

と説明されるが、これも河口旅行記の「七月十五日から九月十五日までの間開ける」、「大抵印度部のヒマラヤ山中に住んで居る人であつて一方の相手は西藏人」という記述と一致する。但し、河口旅行記ではテントが「五六十」、「売買をする人が五六百人」（以上、上巻、175-6 頁）となっている部分が、この三部作においては数字が大きくなっている。

更に、地名のみならず、地名に関連するエピソードを含めてそのまま共通する場合がある。例えば一行が、マナサロワ湖近くの「三途の脱坂」（『無底湖の秘密』、108 頁）という場所で、チベット人が懺悔の祈りをするのを聞く場面がある。

ゝあカンリボ、チェよ、釈迦無尼仏よ、三世十方の諸仏菩薩よ、我生れてから十数人の人を殺し、夥多しき旅客の物品を奪ひ、数限りなき罪惡ありし事を懺悔す、この後とても人を殺し、財を奪ふ事を只今懺悔して置きます、諸仏菩薩、願はくば我身を護らせ給へ（中略）斯う称へて居るのはいづれカム出生の強賊であるらしく見える（『無底湖の秘密』、109 頁）

これは、『西藏旅行記』第三十八回の内容をそのまま引用したと言いうるほど、表現も状況も似たものである。地名も全く同一の「三途の脱れ坂」（上巻、197 頁）であり、懺悔しているチベット人は、「所謂強盜の本場であるカムの人」で、かつ、「実に獐惡な又

(7) 例えば、1903 年 7 月に出版された林暘谷編『大秘密国西藏探險』（又間精華堂）にもこのエピソードは含まれている（111・113 頁）。この著作は、河口旅行談の内容を、河口慧海の許可なく河口の名を使用し内容を引用したいわば海賊版といえるもので、事実河口も『時事新報』紙上に広告を出して抗議している（『時事新報』1903 年 7 月 20 日付）。編者林暘谷には、他に『日露の情勢』（井上一書堂、1903 年）という著作があり、ジャーナリストであったと思われる。

豪壮な姿であつて眼眦杯も恐ろしい」、「強盜本場の中でも一段勝れた悪徒」とされる（上巻、198 頁）。引用されている懺悔の祈りの文言も、非常に似通っている⁽⁸⁾。このカム人の祈りの場面も、前述の大獅子尊者の処刑と同様に、旅行談を引用する記述に含まれるエピソードであり⁽⁹⁾、河口旅行記中、読者に強い印象を残すものの一つであったと思われる。

また、河口旅行記で描写された事物をいわば、脚色、応用して場面が展開されていく場合がある。その一つの例が、河口がマナサロワール湖からラサへ向かう途上目撃した「山犂牛」（上巻、225-6 頁）に関する記述である。河口旅行記では、以下のように記述される。

所が向ふの方に非常に大きな動物が見えた、犂牛の形に似て居るが確かに犂牛でないことは解つて居る、早速何かと云つて尋ねますと彼獣はチベット語に（ドンヤク）とて山犂牛と云ふ非常に恐ろしい者で大きさは通常の犂牛の二倍半或は三倍、背の高さは凡そ七尺、併し象程はない、ジロリと此方を眺めて居る其眼は実に恐ろしい、其角の根元の廻りが二尺五六寸で長さが五尺ばかり、太さは二尺五六寸もあります、是れは其後拉薩府で山犂牛の角を見た時分つたので其時に測量して知つた訳ではない、其犂牛の説明を聞くと矢張草を喰つて居るンですけれども何か腹の立つた時分には飛ンで来て其角で人なり或は他の獣類なりを突殺すのみならず其舌は小剣を並べた如く、一度舐られるとドンなものでもスダスダに切れて了ふという

（上巻、225-6 頁）

一方、第二作『無底湖の秘密』には、以下のような記述が見られる。広海らの一行は、上述の「三途の脱坂」で、「凶悪無残」（『無底湖の秘密』、113 頁）なカム人の男たちに取り囲まれ、乱闘になった。血路を開いて逃げ出す途中に、黒い山のようなものが横たわっており、一行はそれを踏みこえて駆け続けた。すると、「彼の巨巖はむくむくと動いて瓦破と蹶起し」（同、117 頁）、一行を追ってきたカム人たちの方へ疾風のように走り出した。カム人たちは悲鳴をあげてちりぢりに逃げたが、先頭にいた一人は運の悪いことに逃げ遅れ、「坂を駆け上つて行く背後に怪獣の巨角が触れたかと思ふや、串刺にされて悲鳴と共に倒れた」（同、118 頁）。

ここで、この「怪獣」がどのような動物であるかが以下のように説明される。すなわち、河口旅行記で「非常に大きな動物」とされたものが、「巨巖」、「怪獣」、また「犂牛の形に似て居るが確かに犂牛でない」とされたものが、「その丈は象に似て牛形を作したる世界無類の怪物」、更に、「何か腹の立つた時分には飛ンで来て其角で人なり或は他の獣類

(8) 河口旅行記では以下のような記述となっている。「アム、カンリンボ、チエよ、釈迦牟尼仏よ、三世十方の諸仏菩薩よ、私が是迄幾人かの人を殺し、数多の物品を奪ひ、人の女房を盗み、人と喧嘩口論をして人を打撲つた種々の大罪惡を此坂で確に懺悔しました、だから是れで罪はスツカリ減くなつたと私は信じます、是れから後私が人を殺し人の物を奪ひ人の女房を取り人を打撲る罪も此坂で確に懺悔致して置きます（上巻、199 頁）。

(9) 例えば前掲林場谷編『大秘密国西藏探險』（又間精華堂、1903 年）119-120 頁に同様のエピソードが見える。

なりを突殺す」とされたものが、「もし怒る時は飛ぶが如く走り、角の触るゝ所、巖を飛ばし、樹を倒し、人や獣は一突で突殺す」と表現されている（以上、同、117 頁）。いずれも少しずつ、より印象を強める方向へと脚色されていると言える。

同様に、河口旅行記からのこのような脚色、引用が、物語の重要な鍵として利用されている場合がある。やはりラサへの途上、「チャク、サム、ツァンポ」（同、75 頁）という

川岸で、一行を助けたのは英国人宣教師「ジョルジ、ボーグル」⁽¹⁰⁾（同、98 頁）であった。この宣教師の目撃談として以下のような記述がある。

この上の街道を、二百余の駱駝隊が通りました。（中略）荷物は皆箱詰で、上は皮で覆ふてあるから、何が入つて居るか分りませんが、大きな駱駝の荷物としてはその荷嵩は至つて小さい上に、非常に重さうに見える（中略）駱駝牽に尋ねますと、いやさうじゃああるまい、これは露国へ使節に行つたゾーニエル、チエンモといふが何処からか運んで来たものだ（『無底湖の秘密』、103 頁）

これは、河口旅行記の、当時のチベットにおけるロシアの政治的影響力を説明する箇所に記述されている以下のエピソードを利用したものと思われる。すなわち、ロシア、チベット間の「秘密条約」のために、明治 34 年前後に「ゾーニエル、チエンモなる者」がロシアへ出向いたが、その人物の帰国の 2 ヶ月ほど後に、河口がラサ近郊を通りかかった際、200 頭ほどのラクダのキャラバンを見かけた。ラクダの荷物としては小さいのに、非常に重量があるように見えたため、河口が「駱駝牽」に、荷は何であるのか尋ねたところ、「何だか知りません、大方銀塊でもありませう」という答えであった。その後政府の関係者の話から、その「秘密条約」によってロシアから送られた武器弾薬その他であったことがわかった、というものである。河口は後に実際にその武器（「鉄砲」）を見る機会を得たという（下巻、180-181 頁、第一百七回）。

『無底湖の秘密』においても、このどこからか運ばれてきた荷はやはり武器であり、「露国が西藏の欲心を得んための贈物」（『無底湖の秘密』、103 頁）とされる。これらの武器弾薬類は、チー・リンポチェの軍事的拠点の一つであるラサの武器庫におさめられた。ボーグルからこの情報を得た広海らは、ラサに潜入し、この武器庫爆破に成功するのである。

このように、共通点が多々ある両者であるが、三部作において河口慧海自身を思わせる人物への言及は、「先年西藏探険を試み」た「谷口慶瑞師」（以上『世界の秘密国』、19 頁）という表現のみである。しかし大部分においては、地名や人名などの固有名詞や、それにまつわる表現、場面などについて、河口旅行記がなぞられつつ、主人公らが活躍する、いわば荒唐無稽な挿話が各所に織り込まれていったと言える。

(10) この人名と共通するものとしては、河口旅行記に、ウォーレン・ヘイスティングスによってチベットに派遣されたジョージ・ボーグル（1746-1781）への言及がある（下巻、192 頁）。ボーグルは英国人ではあるが、宣教師ではなく、ヘイスティングスの友人で、東インド会社に所属していた人物である（薬師義美『大ヒマラヤ探検史』白水社、2006 年、46-48 頁）。

5.日本人像の造型

もう一つの注目点は登場人物、特に日本人像の造型である。シリーズを通して、登場人物は多くはない。その半数は日本人である。まず、主人公の広海譲は、「熊本の素封家で、数万の資産を有し、一時は地方政界に雄飛して、県会議長の席を占めた事もある、学識深く、徳望高く、而も剛毅果断に富み」（『世界の秘密国』、27 頁）、粘り強く穏やかな性格の持ち主である。「自ら策を案じて自ら事に当らうとする」（『無底湖の秘密』、66 頁）タイプで、「天運強き」（『世界の秘密国』、22 頁）と形容される、37 歳である。

広海の盟友として 2 人登場する。一人が吉野芳人であり、32 歳、「威儀堂々たる風采」（『世界の秘密国』、13 頁）をもち、広海の妹である薫子の婚約者でもある。もう一人が由佐武重、33 歳であり、「豪語は例の如く壮快を極めて居る」（『世界の秘密国』、196 頁）といった、豪放磊落な性格とされる人物である。

この 3 人を助けて働くのが都朗である。彼は「軍事探偵」（『世界の秘密国』、18 頁）で、「先年谷口慶瑞師が西藏探険を試み候際もネパールまで同行」（『世界の秘密国』、19 頁）した、「印度、蒙古の事情に精通する人物」（同）であり、またチベット語にも堪能で、「ネパールから西藏へかけての地理に精しい」（『世界の秘密国』、44 頁）とされる。また、満洲の日本軍において由佐とは同僚で、非常に親密な関係でもあった（『世界の秘密国』、45 頁）。

この 4 人はいずれも 30 代であり、彼等の下に、若手ともいうべき人物が何人かある。言及が多い順に触れると、一人は高松八郎で、高等学校を退学して広海搜索に参加した人物である。「二十四五の血気盛りで、骨格逞ましく、面は赭の如く、双肩は怒つて山のやう、（中略）腕力と喧嘩では負を取らぬ」（『世界の秘密国』、23 頁）と表現されている。次が広海の妹である広海薫子である。25 歳で、広海の盟友吉野芳人と婚約している。「温雅にして内に男子的気性を包んで居る」（『世界の秘密国』、30 頁）女性とされる。更に、やはり広海の盟友由佐の息子である由佐武雄がいる。彼は海軍兵学校への入学準備を中止して、搜索隊に参加した。「活発」（『世界の秘密国』、30 頁）かつ「吞気」な性格（『世界の秘密国』、92 頁）とされる。更に、高松と同様に高等学校を退学して搜索隊に参加した峯岡繁という人物がある。彼は一行がヒマラヤを越える直前、インドのジャングルを横断する際、薫子を守ってトラと戦い、命を落とす。

その他の登場人物としては、チベット人では、広海を魔法で殺そうとした妖僧チー・リンボチェ、その宿敵であり、広海の保護者でもあった高僧センチェン・ドルジェチャン、一行とともにマナサロワル湖で義軍を旗揚げしたアルチュ・ツルグーの他には、断片的に登場するものばかりである。更に、前述の英国人宣教師ジョージ・ボーグル、ヒマラヤ山麓でチベット語の研究を続けている学者サラット・チャンドラ・ダースなどがある。

注目すべきは、主人公の日本人たち、それも登場回数の多い主要な人物に、以下に述べるように、「玄德」、「張飛」、「関羽」、「趙子雲」、「黒旋風」といった表現が使われていることである。言うまでもなく、「玄德」、「張飛」、「関羽」は中国の古典『三国志』の英雄であり、「趙子雲」も同様にこの三国志の「趙雲」（字は子竜）を指すものと思われる。また、高松は仲間うちで「黒旋風」と呼ばれているとされるが（『世界の秘密国』、23 頁）、やはりこれも、中国の古典『水滸伝』に登場する、黒旋風李逵のことであると思われる。例えば、広海、由佐、吉野の三人の関係は「義兄弟」に例えられ、「玄

徳は広海謙、張飛は由佐武重、関羽は吉野芳人であらう、その箇々の性質も殆ど昔の三豪傑に類似して居る」（『世界の秘密国』、28 頁）と説明されている。都に関しても、「趙子雲とでも見立つるが適当」（『世界の秘密国』、49 頁）とされている。このように、人口に膾炙している豪傑の名前で粗々に性格付けされるのみで、これらの作品中においては、どの人物にも、勇敢で志操正しい日本人、という以外の特徴は与えられていないのである。

これは、この鹿島の作品のみ、または、この時期にのみに見られる特徴ではなく、他の作家、他の時代においても、このような傾向が見られる。例えば明治期において少年小説の一時代を画した作家押川春浪（1876-1914）についても、その代表作である「武俠六部作」における人間像の造型が浅薄であることが、すでに指摘されている（長谷川潮「ナショナリズムと児童文学」日本児童文学学会編『児童文学の思想史・世界史』東京書籍、1997 年、80 頁）。また、その後、例えば昭和戦時期に人気を博した山中峯太郎（1885-1966）の少年小説「万国の王城」、「第九の王冠」⁽¹¹⁾などについても、同様の傾向が見られる。更にフィクションにおいてのみならず、このような傾向はノンフィクションにおいても、例えば矢島保治郎（1882-1963）の記述⁽¹²⁾などに見られる。従って、このような傾向は、大陸における日本人の、いわば英雄的な行動が端的に語られる場合の、典型の一つであったと考えられる。いずれも、勇敢な日本人が、知恵と勇気で困難を克服して成功するさま、すなわち日本人の「快挙」を表現するということに焦点がおかれていたために、登場人物たちの人物像もおしなべて「勇敢で義気ある日本人」以上に掘り下げられる必要が認識されなかったのではないと思われる。

6. 横死報道との関連

これらの作品が出版される前年、つまり 1905（明治 38）年は、能海寛がチベット近くで

(11) 「万国の王城」と「第九の王冠」は、それぞれ、一つの物語の前編と後編に相当する。前編にあたる「万国の王城」は、大日本雄弁会講談社の少女向け雑誌『少女倶楽部』に、1931（昭和 6）年 10 月から翌年 12 月まで連載され、その後 1933（昭和 8）年に、大日本雄弁会講談社から単行本初版が出版された。その続編である「第九の王冠」は、同じく『少女倶楽部』に 1933（昭和 8）年 1 月から 12 月まで連載され、1935（昭和 10）年に、実業之日本社から単行本が出版された。

(12) 例えば、矢島の最初のチベット旅行記である、『読売新聞』連載の「辺境を探る」シリーズ「西方地区」が挙げられる。当シリーズは、中国辺境地方の旅行体験談を集めた連載記事で、雲南省と西康省の一部を扱う「南方地区」（1940 年 6 月 26・29 日付）、内モンゴルの綏遠・寧夏地区を扱う「北方地区」（6 月 30 日・7 月 13 日付）、チベットを扱う「西方地区」（7 月 14・22 日付）、新疆を扱う「西北地区」（7 月 23・28 日付）の各章に分かれており、それぞれ別々の「話者」もしくは「語る人」が当該地区での自分の体験を紹介する形式となっている。この連載は 1940 年、『支那辺境物語』（読売新聞社編、成文堂新光社）として出版された。

現地の人々に殺された、という報道が東京・大阪各紙でなされた年である。この横死報道の内容については、拙稿「1905年能海寛横死報道と日本人のチベット観」（『石峰』第10号、2005年、6-12頁）で考察したが、本稿では、この考察結果をふまえ、これらの作品との関連を以下検討したい。本稿で注目したいのは、これらの作品の内容が持つ2点の特徴に、横死報道との共通点が見いだせることである。

能海の横死は当時、「西藏探検の能海寛氏一昨年土人に虐殺さる事実発見惜む快男児骨を雪山に埋む」（「近事片々」『東京日日新聞』1905年7月23日付）と寸評されたように、まさしく「快男児」の悲劇として語られたと言える。例えば『読売新聞』では以下のように報じられた。

辛酸拮据漸く西藏国境に至り一旅寝に投せしに遂に土人の看破する処となり激怒憤恚し白刃を擬して君に迫りしかば暫時の猶予を乞ひ立つて白壁に麗々しく『大日本帝国石見国那賀郡波佐村能海寛此处に於て土人に虐殺せらる』と書して座に就き瞑目すれば閃めく毒刃の下頭ハ千秋の恨みを載せて落ちぬ

（「能海寛氏の最後」『読売新聞』1905年7月23日付）

結果として、現地の人々はその「快男児」の命を奪った残虐な野蛮人として、入蔵は過酷な犠牲をその人々に強いる「探検」として語られたと言える。チベットは単なる「世界の秘密国」（「西藏探検家故能海寛氏」『東京朝日新聞』1905年7月23日付）から、「世界中の神秘国として幾多探検家の生命を犠牲とせる西藏」（「西藏探検家能海寛の最後」『万朝報』1905年7月22日付）、つまり能海が遭遇したような苦難、払ったような犠牲を乗り越えなければたどり着けない国として描かれていったといえる。

このように、彼の死の様子が、「縦容土人が獰猛なる凶手に斃れた」（「西藏探検家能海寛の最後」『万朝報』1905年7月22日付）勇敢な仏教僧の潔い最後、というまるで志士の切腹のような一場の物語にされていることは、以下に見るように、一月後にこの横死報道が誤報であったとされた時の雑誌記事に明確に指摘されている通りである

(13)。

壁に辞世を書き付くる所など、何やら演戲的の感あり、其の間獰悪なる土人が虐殺の刃を猶予せしが如き、又宿屋の主人が壁上の落書を其儘に為しおきが如き、余程小説的

（「能海寛氏の生死」『東洋哲学』第12編第8号、1905年9月5日発行、565頁）

しかしここで注目すべきは、上の引用中に言われている、「演戲的」、「小説的」な点である。この前年に大きな関心を呼んだ河口の旅行談は、「魂飛び肉躍らしむ」、「空前の大活劇」（『大阪毎日新聞』1903年6月4日付）と形容され、そしてその中ではチベットが、その「活劇」にふさわしい舞台として描かれていた。このようなチベット・イメージを考えると、能海横死は、チベットに関連する出来事としてのリアリティを得るために、まさしく冒険活劇の中的一幕、それも河口旅行談で語られた冒険の舞台チベットにふさわ

(13)これに先だって、『時事新報』では、すでに7月25日付の段階で、「演戲的」に類する表現こそないが、「残忍暴戾」の土人が能海が辞世の和歌を書き終わるまで待っていてやるなどという「呑気なる事」は考えがたいと指摘している。

しい形で語られなければならなかったのだと思われる。能海横死のこのエピソードが「演劇的」、「小説的」であることには、能海に関連する場所と言えばチベットであり、チベットと言えば河口の「空前の大活劇」という連想が、新聞記事の書き手にも読者にもあったことを示している。

従って、このシリーズも、この延長線上において生まれたものではないかと思われる。「能海横死」というトピックに触発されて生まれたものであることは、冒頭、能海横死報道と非常に似た状況が設定されて物語が始められることにも見て取れる。例えば、①チベットを目指した日本人が②行方不明になり、③遺書を残して④非業の最期をとげ、その横死の様子が伝えられるがその⑤情報源が軍人であったこと、などは、横死報道を容易に連想させるものであることは明らかである。

そしてそこに、志を貫く「快男児」という能海の人物像をすえ、彼が生きて活躍する様を描いた、その一つの例がこの三部作ではないかと思われる。大陸での日本人の「快挙」という場合に必要な、勇敢な日本人が、知恵と勇気で困難を克服して成功するという文脈をふまえつつ、舞台が「チベット」であることから、リアリティを得るために、河口旅行記の諸状況が利用されたのが、この三部作であったと思われる。

能海の横死が、チベットや仏教関係、地理学などの専門書ではなく、世論の関心が最も集まっているトピックを取り上げて著述の内容とする、このような人物の作品に取り上げられていることは、「能海寛横死」のトピックが当時持った、一般の日本人へのインパクトの大きさを示唆するものであると言える。

付記： この三部作著者鹿島桜巷について、彼が能海に何らかの関係を持っていた人物であるかどうか、更に詳細な調査をする必要性を 2009 年 7 月 12 日能海寛研究会研究大会において奥山直司先生にご指摘いただきました。今後も調査を継続し、当会において成果をご報告したいと思っております。（こうもと やすこ 能海寛研究会会員）

会員の新著紹介

本会会員の高本康子氏は、この程、芙蓉書房出版から『近代日本におけるチベット像の形成と展開』（税込み価格 7,140 円）と題する著書を発刊されました。

日本人のチベット観は、どのように形成されてきたのか？ 広範な視点から、明治初期から昭和期までの日本人のチベット観形成の歴史を著している。

能海寛に関する記述も沢山あります。この機会にご一読をお勧めいたします。

